

分科会	小6年②	都市名	岡崎
提案者	岡崎市立梅園小学校		山崎彰伯

1 研究主題

『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』
～6年「戦国大名 徳川家康の生き方」の実践を通して～

2 はじめに

岡崎市の社会科部は、昨年度までの『学ぶ喜びをわかち合い、共生のあり方を問う社会科の授業』の研究を通して、次のような成果を得た。

- ・ 身近な地域教材を取り上げることによって、学習への関心が高まり、学習課題を意欲的に追究することができた。
- ・ 視点を明確にした調査・見学をし、確かな足場を持った話し合いをすることで、新たな発見や感動を得ることができた。
- ・ 体験や一人調べをもとに人々の思いに迫る考えが出され、その思いに共感することができた。
- ・ 単元を貫く課題を設定した子供たちは、主体的に学習する姿を見せ、確かな社会認識を持つことができた。

これらを踏まえ、今年度からは新たに『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』というテーマで取り組んだ。共に幸せを感じることでできる社会を作っていくために、外国の人々、過去の人々、自分と立場の違う人々などの生き方や考え方を見直し、自分が共生の対象や社会にどんなにかかわり方（働きかけ）をしていったらよいかを考えながら、自分の生き方をも問うていきたい。

3 研究テーマのとりえ

- | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>① <u>学ぶ喜び</u>・・・ 見学や個人追究活動など、子どもたちが社会事象を自分で捉え、新しい発見をしたり、疑問を自分で解決したりしたときに感じる喜び</p> <p>② <u>わかち合う</u>・・・ 追究活動や話し合い活動を通して、自分の意見を言ったり友達の意見に触れたりして、自分の認識を広め深めること</p> <p>③ <u>共生社会をめざした生き方を問う</u>・・・
先人・自分・友達の生き方を互いに比べ、時代を超えて様々な生き方があることを知り、自分が共生の対象や社会にどんなにかかわり方をしていったらよいかを考えながら、自分の生き方を決めていこうとする</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

今年度は、「戦国大名 徳川家康の生き方」（6年）を研究単元とした。6年生の歴史学習は、それぞれの時代を生きた人物を取り上げることが中心となる。子供たちの住む学区に関連の深い人物を取り上げ、子供の概念を覆すような事実に出合わせることであれば、子供たちは興味を持って学習に取り組み、学習内容を共に分かち合いながら学ぶことができると考える。本校の学区には、徳川家康に関係の深い寺社が数多く存在する。しかし、子供たちは、そのような寺社が存在することに気づいていない。そこで、徳川家康を取り上げ、新しい発見ができるような単元構成を工夫すれば、子供たちが学ぶ喜びを感じながら学ぶことができるはずである。

単元の導入で、徳川家康にまつわる伝説について、身近な寺社を実際に訪問して調べる。子供たちは、徳川家康が腰掛けたという「虎石」、徳川家康の祖父清康や育ての親久子の墓、などについて調べる。調べたことの発表を聞きあうことで、徳川家康に関する伝説が身近な学区に残っていることに驚きを感じるは

ずである。

また、徳川家康の伝説調べを通して、家康の妻築山御前と長男信康が、家康によって殺害されたことを知る。自分の妻・長男を殺してしまう徳川家康の生き方に、子供たちは疑問を持つはずである。この疑問をもとに、戦国大名徳川家康の生き方を詳しく調べる。今とは大きく違う徳川家康の生き方と自分の生き方を比べる活動の中で、自分の生き方をもう一度考え直す機会を設定したい。

4 目指す子供像

① 身近な梅園学区に残る徳川家康に関わる事柄について、問題意識を持ちながら自ら追究活動に取り組み、徳川家康の生き方について自分なりの考えを持つことができる子供。

② 自分の意見を発表したり友達の意見を聞いたりするなかで、戦国時代を生きた徳川家康の考え方と、今の自分たちの考え方との違いを比較し、家康の生き方に共感したり批判したりして当事りの時代背景を的確にとらえる子供。

③ 家康の生き方についての追究を深める中で、自分の生活を見直すことができる子供。

5 研究の仮説

① 子供たちの学区にゆかりのある歴史人物を教材化し、子供の概念を覆すような事象に子供たちを出合わせていけば、子供たちは問題意識を持ちながら生き生きと追究活動に取り組むだろう。

「徳川家康が岡崎出身である」という事実は、子供たちによく知られた事実である。しかし、徳川家康にちなんだことやものが、梅園学区にも数多く残されているという事実を、子供たちは知らない。そこで、梅園学区に残る徳川家康に関係する出来事やものを取り上げれば、子供たちは生き生きと追究活動に取り組むであろう。

また、調べたことをもとに、徳川家康の生き方について子供たちが感じた疑問を焦点化して課題を設定していくことで、子供たちの学習意欲がさらに高まり、追究を深めていけるようになると思う。

② 自分の意見を発表したり友達の意見を聞いたりする話し合いの場を設定することで、子供たちはいろいろな考え方があることに気づき、自分の考えをより広め深めることができるだろう。

話し合いを通して友達とかかわりあう中で、子供たちは、これまでの自分の考え方を振り返り新たな認識を持てるようになると思う。本単元では、信長の命令（築山御前や信康の殺害命令）に従った家康について話し合う場を設定する。この話し合いでは、二人を殺害した徳川家康の生き方に反対という意見と、戦国時代の社会情勢から二人を殺害したのは仕方がないとする意見が対立するだろう。異なった考え方に触れることで、自分の考えを広め深めることができるだろう。

③ 戦国時代と現代を比較しながら自分を見つめる場を設定し、歴史人物の立場から戦国時代を振り返るようにすれば、自分の生き方について見つめ直すだろう。

家康が築山御前と信康の殺害命令を受けたことについて追究を深めた段階で、子供たちに自分が家康の立場だったらどうするかと問い直す。戦国時代の社会情勢を学んだ子供たちは、苦渋の選択を迫られた家康が、どのような決断をすべきだったのか考えるだろう。家臣、領地の農民など周りの人々の幸せのために、自分の意に反した決断をしなければならなかった家康。子供たちは、このような状況に置かれた家康について考えることで、人は生きていくためには、様々な考え方や複雑な社会情勢を総合的に

捉えて生きている気付き, さらに自分の生き方についても見つめなおすことができるであろう。

6 単元構想

7 実践

①学区に残る家康伝説に気づく子供たち

第1時では、身近な寺社に徳川家康に関する伝説が残されていることに気づかせるため、大泉寺を取り上げて授業を行った。大泉寺には、家康の母である於大の墓が残されている。教師が

撮影したビデオ映像で、於大の墓や家康が3歳の時に於大と別れたことを紹介した。

子供たちは、3歳の家康が、母と離れ離れになってしまったことに関心を寄せた。

「かわいそう」とつぶやく子供が多くいた。中でも児童Aは、離れ離れになった理由を「家柄の関係」と捉えている。また、児童Bの感想を読むと、子供たちの家康に関する認識は、まだまだ低いといえる。しかし、「岡崎城以外にも家康に関係するお寺があるなんて知らなかった。他にも調べてみたい」という感想のように、家康に関係のある

寺社や出来事に興味を示す感想が、多く見られた。子どもたちは、自分たちの身近にある寺社が徳川家康と関係を持つことに驚きを感じたようだった。

そこで、身近な寺社に伝わる家康にちなんだ出来事やものについて調べる計画を立て、個人追究を行うことにした。子どもたちは、授業後、自分たちで見学に行って写真を撮影したり、住職さんにお話を伺ったりして、個人追究を行った。家康の祖父清康の墓、於大に代わって家康を育てたお久の墓（隋念寺）、家康が腰掛けた虎石（誓願寺）など、子供たちは次々と家康伝説を発見してきた。また、八柱神社には、家康の妻築山御前の墓があること、若宮八幡宮には家康の長男信康の墓があること、また2人は殺害されたことを調べる子供がいた。

調べたことは、画用紙にまとめたり、プレゼンテーションソフトを利用してまとめたりして、発表時に使えるように準備した。

②家康の決断に問題意識を持ち追究する子供たち

第3時では、個人追究で調べたことを発表しあった。住職さんにインタビューしたことや、家康が腰掛けたという虎石に腰掛けたことなどを、生き生きと発表した。

発表の中で、子供たちが特に興味を持ったことは、築山御前と長男信康が殺されたことだった。そこで資料2「信長からの命令」を子供たちに提示した。この資料から、子供たちは、築山御前と信康が信長

児童A: 家康は、3才という幼いころにお母さんと離れ離れになってかわいそう。
家柄の関係はどうにもならないということを実感した。

児童B: 家康にそんなことがあったなんて知らなかった。於大も自分の子供を置いて刈谷に行くなんてかわいそうだと思った。

資料1 第1時授業後の感想



娘・徳姫（信康の妻）の手紙を読んだ信長は、家康の重臣、酒井忠次を呼んで手紙の内容が本当であるか問いただした。酒井は、手紙の内容を認めるような返事をしたので、「信康と築山殿を処分するように。」と酒井に言った。
酒井からその命令を聞いた家康は顔色をかえた。

資料2 信長からの命令（要約）

の命令を受けた家康によって殺害された事実を知った。すると、子供たちは、「私だったら逃げる」とか「命令に従わないと殺される」、「自分だったら織田信長と戦う」といったようなさまざまな意見を発表し始めた。話し合いを終えた後、子どもたちは授業の感想をまとめた。資料3を見ると、児童Aは、自分の理想的な父親像と家康を比較しながら、二人を殺してしまった家康の生き方に疑問を持つようになった。他の多くの児童も、「築山御前や長男信康を処分せよ」という信長の命令に従った家康の決断に驚きを感じたようだった。大きく分けて「自分なら従う」という感想と「自分なら織田信長と戦う」という感想が多く見られた。その中で、児童B

の「どうして命令に従わなくてはならなかったのか気になる。」という授業感想を取り上げ、『どうして家康は、築山御前と信康を殺害する命令に従ったのか』について、みんなで調べていくことにした。子どもたちは、徳川家康の下した決断にはっきりとした問題意識を持って、個人追究に取り組むこととなった。

児童A：家康もお父さんなんだから、家族が幸せになれるように、信長が言っていることをやっているのか、やってはいけないのかを考えればよかったはず。

児童B：家康がやったことはひどいと思った。でもどうして命令に従わなくてはならなかったのか気になる。

資料3 第3時授業後の感想

③家康の生き方に自分なりの考えを持ち始めた子供たち

第5、6時の個人追究では、子供たちは図書資料やインターネットを利用した。図書資料は、教師が郷土資料や徳川家康の伝記を用意した。特に、徳川家康の伝記については、関係箇所を全員に印刷した。インターネットについては、自由に調べさせたが、多くの子供は、『武将のふるさと愛知』という愛知県が作成しているホームページを利用しており、信長、家康、徳姫（信康の妻）、築山御前、信康という5人の人物を中心に個人追究を行っていた。

子供たちは、資料4のような個人追究重ねていった。児童Aは、①手紙には、武田氏との内通

- ・徳姫からの手紙の内容
- ・松平・今川・織田の同盟関係の移り変わり
- ・信長の性格
- ・二人が殺害された時の状況
- ・信康の行動、性格
- ・築山御前と武田氏の関係
- ・家康と築山御前の関係

資料4 個人追究の内容

について書かれていたこと、②徳姫に男子が生まれなかったことから、徳姫と築山御前の仲が悪くなったこと、③信長が家康の忠誠心を試すために命令を出したことについて調べた。そして第7時では、それぞれの個人追究の結果を発表しあった。

第7時終了後の児童A・Bの授業感想は、資料5のように書かれていた。児童Aは、これまで「家族を大切にすべき」という考え方をとってきた。第7時の感想にも、家族より同盟を大切

児童A：家族の命より同盟の方が大切なのが不思議でした。戦国の世は、こういうふうなんだなあとおつくづく思った。自分に都合が悪くなるとすぐ殺すという考え方だと、今の世の中は殺人犯だらけで生きていけない。昔は我慢がなかったのかなあ。このままの時代続いたら、今の世の中はないと思います。家康のことでは、同盟やこれからの徳川家（二人より先の子孫）のために、二人は死んだんだと分かった。先を見ている感じがする。

児童B：みんなたくさん調べたなあと思った。殺した理由ははっきりと分らなかったので少し残念だった。昔の人は、家族より土地や地位がほしいなんてばかだなあと思った。ぼくだったらそんなのよりも農民でいいから家族と一緒に暮らしたいと思った。

資料5 第7時授業後の感想

にする家康を「不思議」としている。しかし、第7時の話し合いで、三河の国が織田や今川、武田といった強国に挟まれていたこと、織田信長の性格などについて調べた発表を聞き、「戦国の世はこういうものなのだ」という新たな認識を持つようになった。児童Aは、戦国時代と今の世の中との違いに気づき始め、自分の考えをより広め深めることができたと言える。また、命令に従った家康についても「先を見ている感じがする」とし、以前とは違った捉え方で、家康を見つめなおすことができた。

また、児童Bは、みんなの調べを肯定的にとらえる一方、「殺した理由ははっきりとわからない」として、納得のできない部分があるようである。しかし、「ぼくだったらそんなのよりも農民でいいから、家族と一緒に暮らしたいと思った」と感想をまとめ、戦国時代を生きる武士が厳しい決断を下さなければならなかったことに気づき始めている。また、自分ならどうするかという視点で考えている。第7時の話し合いから、家康の生き方を自分に置き換えて考え始めるようになった。

④かかわりあって自分の生き方と比べる子供たち

第8時は、「信長の命令に従った家康について話し合おう」という課題で、話し合うことにした。資料6は、その授業記録の一部である。多くの子供たちの意見は、「仕方がない」という意見だったが、少数だが「家康は偉い」という意見もあった。

児童Bは、前時までは資料5のように家康の行動に疑問を感じていたが、C6の発言を受けてC12「徳川家を守れるなら仕方がない」という考え方をするようになった。児童Bは、人を殺すことが悪いことだと認識している。しかし、戦国時代を生き抜くためには、家族を犠牲にしなければならなかったことを詳しく知り、「仕方がない」という考え方をするようになった。

児童B以外にも、家康の生き方に触れ、自分の考えを深めたり新たな考え方を持ったりする児童がいた。C22やC42の発言は、子供なりにこうすべきであったと考える意見である。自分の生き方を決めるとまではいえないが、自分ならどうするかという考え方が表れ始めている。特にC22の発言を受けて、C24やC31のように意見の交換が行われている。これら反対の意見や友達の意見に絡み合う意見から、子どもたちは生き方について自分なりの考えを持ち始めていると考えられる。授業の後半は、根拠のはっきりしない意見の言い合いが多くなった。

児童Aは、第8時の授業では、発言が見られなかった。しかし、資料7のような授業後の感想をまとめていた。

資料6 第8時の授業記録（一部）

児童A: 友達の意見や家康の思っていたことを聞くと、殺すか殺さないかすごい迷う。でも私だったらもう少したくさん努力をする。妻や子供の命のために努力する。それでもだめだったとしても、逃がしたりする。家康のように決断を早くしない。

この勉強をする前の家康は、有名で強い武士としか思わなかった。でも授業をやっていくうちに、家康ははじめからすごい武士の息子でもなくたくさん努力したんだと思った。でも、2人を殺したことが分かってから、いいイメージではなくなった。家族を思って行動しているように見えないから。

児童B: 僕は、その時代の人間じゃないからその時の本当の様子は分からないけど、きっと僕が思っている以上に厳しい世の中だと思う。だとしたら、僕も家康と同じことをすると思うし、絶対一生後悔すると思う。殺してしまった家康については、仕方がないと思う。

資料7 第8時授業後の児童A・Bの感想

第8時の授業後の感想では、多くの児童が、「今日の話合いをして、家康がどうすべきだったのか分からなくなった」という内容をまとめた。

児童Aは、自分が家康の立場だったら「殺すか殺さないかすごい迷う」と書いている。単元を通して「家族は大切である」という視点から家康の生き方を捉えてきた児童Aは、家康の生きた状況や友達の意見にふれ、考えがゆれ始めている。さらに感想を読むと、「でも私だったらもう少したくさん努力をする妻や子どものためにもっと努力する。それでもだめだったとしても逃がしたりする。家康のように決断を早くしない」という記述が見られる。児童Aは、「私だったら」というように家康と自分を置き換え、自分なりの生き方について考えは始めている。また、児童Aは、家康が苦渋の決断を迫られていることを学び、全てがうまくいくような解決策を考えついたわけではない。児童Aの「もう少し努力する」とか「逃がしたりする」という考え

方には、困難な状況の中では、実現可能な範囲内で問題に取り組んでいかなくてはならないという姿勢が感じられる。このように、歴史人物の立場から戦国時代を振り返ることで、自分の生き方を見つめる姿が

少しずつ見られるようになった。

また、資料7児童Bの感想を見ると、「その時代じゃないからその時の本当の様子は分からない」としながらも、戦国時代と自分の生活には大きな違いがあること、そし

The image shows a student's handwritten work titled "家康新聞" (Yasukuni News). It is a complex piece of work with multiple sections:

- Top Left:** A family tree diagram showing relationships between various figures, including names like 家康, 信長, 信玄, and others, with dates and descriptions.
- Top Middle:** A map of the region, likely around the Tama River area, with labels for various locations and figures.
- Top Right:** A section titled "家康新聞" with a sub-header "家康の生きた時代" (The era Yasukuni lived in). It contains several columns of text, including a section titled "家康の生き方" (Yasukuni's way of life) and another titled "家康の死" (Yasukuni's death).
- Middle:** A section titled "家康の死" (Yasukuni's death) with a sub-header "家康の死" and a sub-sub-header "家康の死" (Yasukuni's death). It contains text about the events surrounding his death.
- Bottom:** A section titled "家康の死" (Yasukuni's death) with a sub-header "家康の死" and a sub-sub-header "家康の死" (Yasukuni's death). It contains text about the events surrounding his death.

資料8 家康新聞

児童A

家康みたいに、お父さんとお母さんの仲が悪い家族はいやだなあ。やっぱり家では、のんびりやすらぎたい。

家族に関して、私は弟とよくけんかするけど、本当ににくたらしいわけではなくて、心の中では元気な弟でいてほしいと思っている。

児童B

家康は、徳川家を守るために妻や子どもを殺す命を受け入れた。強い人だなあと思う。僕が家康の立場だったら、そんなことはできないと思う。

でも、家康と同じように何かを決めなければならないという場面のとき、どっちかが大切か考えて決めるようにしたい。自分のことだけを優先するんじゃなくて、友達とか他の人のことも考えていきたい。

資料9 家康新聞を見合った後の児童A・Bの感想

て戦国時代は厳しい世の中であることを、自分なりにとらえることができています。

第8時の授業を終え、子どもたちはこれまでの学習を振り返って家康新聞をまとめた。資料8は児童A,Bの家康新聞である。子どもたちはお互いの新聞を見合った後、最後に感想をまとめた。

資料9 児童Aの感想には、家族は温かいものでありたいという願いが感じられる。温かい家庭であるために、自分が何をすべきか明確な自覚はないまでも、弟に対する温かい気持ちを持つことができた。

また、児童Bの感想には、「自分のことだけを優先するんじゃなくて、友達とか他の人のことも考えていきたい。」という記述が見られる。戦国時代と今の違いを理解した上で、児童Bは、家康の生き方から、「どっちが大切か考えたい」「他の人のことも考えていきたい」と学んだ。

い」と学んだ。

8 研究の成果と課題

仮説①について

子供たちの個人追究活動の様子や児童の授業感想記録から、子供たちに身近な学区にゆかりのある歴史人物を教材することは、子供たちの追究活動への意欲を高めるために有効であった。

仮説②について

授業記録や個人追究活動の様子から、家康の生き方について話し合う場面を取り入れることで、自分とは違う考え方に気づき、自分の考えに取り入れたり批判したりする姿が見られた。このことから、自分の考えを広め深めるために有効であったと言える。

仮説③について

授業記録や授業感想記録から、戦国時代を生きた家康の生き方について自分と比べながら考えることで、自分の生き方について考えはじめるようになった。

今後の課題について

自分の生き方を見つめ直す機会になった今回の実践であったが、子どもたちが、共生社会を深く意識して普段の生活を見直すことができたのかという点で、まだ十分ではなかった。今後は、共生社会について学んだことを、自分の生活に生かすことのできる子どもの育成を目指していきたい。

